



のぎのんと学ぶ

# 野木町



野木町のあゆみ  
改訂版



# 野木町の原始・古代



野木町は  
栃木県内有数の  
遺跡集中地区なんだって。  
昔から暮らし  
やすかったんだね。

## 旧石器時代

紀元前14,000年頃

野木Ⅲ遺跡（野木）が残される  
（野木町最古の人類の痕跡）

## 縄文時代

紀元前10,000年頃  
（草創期）

清六Ⅲ遺跡（野木）の石器群が残される

紀元前5,000年頃  
（前期）

野渡貝塚（野渡）・御櫛内貝塚（野渡）などの  
遺跡が残される

紀元前3,500  
～2,800年頃（中期）

松原北遺跡（友沼）が残される  
（野木町最古の集落跡）

## 弥生時代

紀元前後（中期）

清六Ⅲ遺跡に再葬墓が残される。

1世紀（後期）

杏林製薬工場内遺跡（野木）・佐川野下I遺跡  
（佐川野）に二軒屋式（後期）土器が残される

## 古墳時代

5世紀（中期）

下毛野国造（古代の地方長官）の奈良別が  
笠懸野台手箱（野木町煉瓦窯付近）に祠を建てた  
とされる（「野木宮由来」による）

6世紀（後期）

杏林製薬工場内遺跡（野木）に大規模な集落が  
作られる

## 奈良・平安時代 前期

延暦年間（782～806）

坂上田村麻呂が野木神社を今の場所に移し、  
いちようを植えたとされる

9世紀

松原北遺跡（友沼）を始め町内各地に多くの  
集落が営まれる

10世紀

『和名類聚抄』（わが国初の百科事典）に寒川郡  
奴宜郷が記載される

## 花開く縄文文化

### 縄文時代 紀元前1万年～300年

清六Ⅲ遺跡（野木）では、約12,000年前  
の石器が発見されています。また、約6,500  
年前には、野木町の近くまで東京湾の海水  
が入ってきており、野渡地区で発見された貝  
塚からは、シジミやカキの貝がらも見つかっ

### 弥生時代 紀元前3～3世紀

縄文時代の終わり、紀元前2～3世紀頃北九州地  
方に伝えられた米作りの方法は、瀬戸内海を経て近  
畿地方に広まり、その後栃木県にも伝えられました。  
栃木県の弥生文化については、不明な点がたくさんあ  
ります。縄文時代の風習を残しながら稲作が始まった  
ようですが、当時の様子を残す遺跡の発見は少なく、  
水田の跡なども発見されていません。清六Ⅲ遺跡（野  
木）からは、弥生時  
代中期（紀元前後）  
とされる再葬墓とい  
われる墓の中に、骨  
壺として使われた弥  
生土器が十数個発見  
されています。



1世紀頃の弥生土器

（清六Ⅲ遺跡）

## ◆ 歴史の中の野木町

野木町は西側に雄大な渡良瀬遊水地があり、その中を  
思川・渡良瀬川・巴波川などの河川が流れ、原始古代か  
ら変わらない湿地景観です。東側高台（洪積台地）の上  
に町の中心街が広がっており、遠く富士山や日光連山を望  
むことができ、原始古代から多くの人々の行き交う地でし  
た。遊水地を見下ろす台地上には、旧石器時代から古墳  
時代までの多数の遺跡があり、栃木県内でも有数の遺跡  
集中地区です。古代には寒川郡の一郷として村々が点在。  
鎌倉時代には奥の大道（鎌倉時代の幹線道路）と思われ  
る古道がありました。近世には日光街道の宿駅など、各  
時代を通じて交通の要衝でした。現代も野木町は主要幹  
線道路、鉄道路線の道筋となっており、栃木県の南の玄  
関口として大きな役割を果たしています。



野渡橋から望む思川と渡良瀬川の合流



## 旧石器時代

# 火山灰の中の石器

私たちが生活している地面の下、50cm くらいには関東ローム層と呼ばれる今から1万年以上前、火山噴火により降り積もった火山灰層があります。この層の中から旧石器時代の人が過ごした痕跡（石器）が発見できます。現在わが

国では、約4万年前ま

での遺跡が確認されていますが野木町では、野木Ⅲ遺跡（野木）から約16,000年前の道具（石器）が見つかっています。

旧石器

（野木Ⅲ遺跡）



ています。縄文時代中期は、文化が発達した時代で、人口も増え大きな集落が営まれました。用途に応じた土器が作られ、松原北遺跡（友沼）では、大規模な集落跡が確認されています。

## 古墳時代 4世紀～6世紀

全国各地に古墳が作られた時代です。野木神社周辺の古墳から「面文帝神獸鏡」が発見され、古墳時代前期（4世紀）から古墳が作られたことが分かります。中期（5世紀）の遺跡は未確認ですが、下毛野国造（古代の地方長官）の奈良別が笠懸野台手箱（野木町煉瓦窯付近）に祠（野木神社のはじまり）を建てたとの言い伝えがあります。

後期（6世紀）には、杏林製薬工場内遺跡（野木）に大規模な集落が、また南赤塚地区には大塚古墳（方墳・県指定史跡）が造営されています。

## 奈良・平安時代前期 7世紀～10世紀

645年の大化の改新後、地方は国、郡、郷、里という行政単位に分けられ、大宝元（701）年の大宝律令制定後、全国の大半が律令制下に組み込まれました。平安時代の初期に編さんされた『和名類聚抄』（わが国初の百科事典）に寒川郡奴宜（野

木の古い地名）郷との記載があり、野木域は律令制下の行政単位として成立したことが分かります。松原北遺跡（友沼）では9世紀を中心とする集落跡や、「寒」と墨書された土器片、当時の役人の正装に使われた帯金具（丸鞆）が発見されています。

縄文土器

（松原北遺跡）



大塚古墳



9世紀の墨書「寒」土器

（松原北遺跡）





## 平安時代 後期

12世紀中頃

小山氏が現在の小山市と野木町付近を治める

寿永2年(1183)

小山朝政らが常陸国の志田義広と野木宮(野木神社)で戦い、志田義広を敗る(野木宮合戦)

## 鎌倉時代

文治元年(1185)

源頼朝、野木宮合戦勝利の後に下野国寒河郡を神社の領地として寄進

建仁年間(1201~04)

野木神社の「七郷巡り」がはじまったとされる

## 南北朝時代

康暦2年(1380)

鎌倉公方足利氏満が軍勢を率いて小山義政を攻め、義政は自害する(～1382年:小山義政の乱)

## 室町時代

応永年間

(1394~1428)

結城基光、次男泰朝に小山氏の名跡を継がせる

## 戦国時代

天正3年(1575)

小山秀綱、北条氏の攻撃を受け祇園城(小山市)を明け渡す(後に北条氏の統制の下、再び祇園城へ戻る)

天正18年(1590)

徳川家康の次男の結城秀康が旧小山領野木地域を治める



1,600年の歴史がある  
野木神社は、ずっと  
野木町で暮らす人びとを  
見守ってきたんだね

## 平安時代・後期

## 野木宮の創立と由来

野木宮(現在の野木神社)は今から約1,600年前、下毛野地域(栃木県南西部)を治めるため中央からやってきた奈良別という人物が、仁徳天皇の弟・菟道稚郎子の霊を山城国(京都府中・南部)から笠懸野台手箱(野木町煉瓦窯付近)へ移し祠を建てて祀ったのがはじまりと伝えられています。その後、延暦年間(782～806)には、坂上田村麻呂が蝦夷との戦いに向かう途中、野木宮に祈ったおかげで勝つことができ、そのお礼に祠を現在の場所へ祀ったとも伝えられています。

そして鎌倉幕府を開いた源頼朝は、寿永2(1183)年の野木宮合戦で勝利した後に野木を含む下野国寒川郡を神社の領地として寄進しました。また戦勝を祝い、神馬を捧げました。江戸時代になると、神社は古河藩のお殿様から大切に守られました。現在の建物は、文政4(1821)年に古河藩のお殿様たちによって建て直されました。

## ◆ 野木神社の「七郷巡り」

「七郷巡り」は、源頼朝が寄付した神社の7つの領地(現在の小山市南西部の寒川地区)を宮司などが御神霊を持って巡る行事で、今から約800年前にはじまったと伝えられています。12月3日の夜に行われる「提灯もみ」というお祭りは、この「七郷巡り」が起源です。

## ◆ 板碑 中世の供養碑



十三仏板碑(右)

(岩崎裕子氏所有)

中世の人々の信仰を反映するものとして重要なのは「板碑」といわれる供養碑です。野木町では166基確認されています。正元元(1259)年銘板碑(満福寺蔵)や文明3(1471)年銘十三仏板碑など貴重なものが見つかっています。



野木神社



平安時代・末期

## 源頼朝の挙兵と野木宮合戦

治承4(1180)年、源頼朝は伊豆国(静岡県東部)で平氏を倒すべく立ち上がり、その後相模国(神奈川県)鎌倉で活動していました。そんな中、頼朝の叔父で常陸国信太荘(茨城県稲敷市)を治めていた志田義広が頼朝と対立。義広は多くの軍勢を率いて、頼朝がいる鎌倉に向かうと見せかけて下野南部へと向かいました。

当時、野木地域を含む下野南部を治めていた小山朝政は、弟たちが頼朝の家臣だったこともあり頼朝に味方します。朝政は義広からの誘いに対して味方になるといつわり、義広が小山氏の住まいへ来る途中の野木宮近くで待ち伏せて戦う作戦に出ます。寿永2(1183)年2月、義広の軍勢との激しい戦いの末、多くの味方をつけた朝政＝頼朝方が勝ちました(野木宮合戦)。この勝利に

よって、頼朝の北関東での敵はいなくなり、一族の源(木曾)義仲や平氏を倒して鎌倉幕府の基礎を築いていくこととなりました。



小山朝政画像

(秋元孝春氏提供)

平安～戦国時代

## 野木を治めていた小山氏

平安末期から南北朝時代にかけての約200年間、小山氏が野木を治めていました。当時の小山氏は都賀郡小山郷(小山市)を本拠地に、下野国の最高実力者として重要な職に就いていま

した。野木宮合戦では源頼朝方の勝利に貢献。鎌倉時代には、北関東一の有力な御家人(幕府の家臣)として大きな影響力を持ちました。

南北朝時代の康暦2(1380)年、鎌倉公方足利氏満が軍勢を率いて小山義政を攻め、野木を含む小山地域に大きな影響を与えました(小山義政の乱)。小山氏が滅ぼされた後、一族の結城氏によって小山氏の名が受け継がれました。当時の野木は古河公方(将軍の別名)の足利氏が治めていましたが、戦国時代末期には北条氏に従っていた小山氏が再び治めました。やがて豊臣秀吉によって北条氏が滅ぼされると、小山氏は没落。野木地域は、徳川家康の次男で結城氏の養子となった結城秀康が治めることとなりました。



小山市鷲城跡

(小山市教育委員会提供)





野木町には日光道中と  
思川の河岸(船着場)が  
あって物資の輸送など  
が盛んだったんだね

## 安土・桃山時代

慶長5年(1600) 徳川家康が小山に到着。  
諸将を集め軍議する(小山評定)

## 江戸時代

- 慶長7年(1602) 日光道中野木宿が成立
- 慶長8年(1603) 徳川家康が征夷大将軍となり、江戸幕府を開く
- 元和2年(1616) 野木宿内に寺院がないため、宿内に野木神社を管理する満願寺を建立
- 元和3年(1617) 徳川秀忠が日光に祀った父・家康を参詣(日光社参のはじまり)
- 元和5年(1619) 野木地域が小山領から古河藩領となる
- 元和6年(1620) 奥州街道筋「中田～野木～小山間」に松を植える
- 寛永13年(1636) 友沼八幡神社が徳川家光の日光社参の休憩所として整備される。この頃、日光道中が完成する
- 宝暦年間(1751～64) 乙女河岸の一部だった友沼河岸が独立
- 文化3年(1806) 野木神社が火事で焼失
- 文政4年(1821) 野木神社が古河藩主・土井利厚によって再建される
- 天保14年(1843) 将軍家慶が日光社参の折、友沼八幡神社にて小休止
- 慶応3年(1867) 王政復古の発令を発す

## 江戸時代

### 古河藩領下の野木

慶長5(1600)年、関ヶ原の戦いに勝ち、全国の支配権を手に入れた徳川家康は、慶長8(1603)年に朝廷から征夷大将軍に任命され、江戸幕府を開きました。この頃の野木地域を含む小山領は、家康の家臣だった本多正純が治めていました。その後、正純は宇都宮へ国替えとなりましたが、この時に小山領は古河藩領に組み入れられました。

古河藩領となった野木地域には、五街道のひとつである日光道中の宿場(野木宿)や川を利用して物資の輸送が行われるなど、多くの人でにぎわっていました。一方、宿場の東側には畑や御林(幕府や藩が管理する山林)が広がっていました。畑では主に大豆や小豆、荏胡麻などをつくる一方、そばや大根などの野菜を栽培し、農家はそれらを野木宿や古河城下などで売って現金収入を得ていました。野木地域は交通にとって重要な場所であり、農村もその影響を受けながら、生活していたと言えるでしょう。

## ◆五街道



旧野木宿道標

江戸幕府を開いた徳川家康は、全国支配の足がかりとして交通網の整備を行いました。中でも、江戸を出発点とする五街道の整備に力を入れました。五街道とは、東海道・中山道・甲州道中・日光道中・奥州道中のことをいいます。五街道

では、旅人を泊め、荷物を運ぶための人や馬を集め、そして重要な文書(ひまわり)を運ぶ「飛脚」を置いた街道沿いの集落である「宿駅宿場」を定め、また幕府の命令などを伝える人や物資を馬で運ぶ「伝馬」を使うなど、幕府にとって地域をつなぐ重要な役割を果たしていました。



古河城二の丸から三階櫓

(「古河市郷土写真集」より)



江戸時代

## 日光道中野木宿と友沼河岸の成立

江戸時代の野木地域には、陸・川の交通にとって重要な場所がありました。ひとつは日光道中野木宿で、慶長7(1602)年に成立しました。野木宿は江戸日本橋から数えて10番目の宿場で、本野木と新野木から成っていました。両野木には「問屋場」という施設がそれぞれ2カ所ずつ置かれ、1カ月交替で運営していました。ここでは、幕府の役人や大名などが宿場を利用する際に必要な馬や人を用意し、荷物を次の宿場まで運ぶ業務(継立)と幕府の重要な文書や品物を次の宿場へ届ける業務(継飛脚)を行っていました。

もうひとつは、物資の輸送のため思川につくられた友沼河岸です。元々は隣の乙女河岸の一部として物資の揚げ降ろしを行っていました。河岸

からは主に年貢米を江戸へ運び、江戸からは肥料や食料品などが運ばれていました。友沼河岸が乙女河岸から独立したのは、宝暦年間(1751～64)の頃と考えられています。



友沼河岸

(「野木町史」より転載)

江戸時代

## 日光社参と野木

江戸時代最大のイベント、それは徳川将軍家による日光社参でした。日光社参とは、徳川将軍家が徳川家康の命日に家康が祀られている日光東照宮を参拝する行事のことです。2代将軍

秀忠から12代将軍家慶まで19回行われました(17回とする説もあります)。

社参では、時の将軍をはじめ、お供をする大名や将軍家の家臣などが大行列をなして日光道中を歩きました。12代将軍家慶の時、天保14(1843)年には、重臣60余名と多数の従者を率いて行われています。

野木地域では、江戸出発から3日目の最初の休憩地として友沼八幡神社が利用されました。この神社はもともと小さな祠だったのですが、寛永9(1632)年の3代将軍家光による日光社参で社殿を備えた大きな神社になったそうです。境内には「運西庵」という将軍専用の休憩所が建てられました。正面には遠く筑波山を望むことができ、当時もその眺めを楽しんだことでしょう。

友沼八幡神社





## 明治時代

明治2年(1869)	野木町域が古河県に属する
明治5年(1872)	野木町域が古河県から栃木県に移管される
明治14年(1881)	野渡村に製糸業古河同土社が設立される
明治17年(1884)	陸羽街道の本格的な改修により、栃木県内を南北に貫く国道が整備される
明治18年(1885)	東北本線大宮-宇都宮間が開業
明治21年(1888)	下野煉化製造会社が設立される
明治22年(1889)	町村制施行により、野木村ほか10ヶ村が合併し下都賀郡野木村となる 下野煉化製造会社にホフマン式輪窯1基(西窯)が完成
明治23年(1890)	下野煉化製造会社にホフマン式輪窯1基(東窯)が完成



野木町にも様々な形で近代化の波が押し寄せてきたんだね

## 明治時代

## 古河県から栃木県へ

慶応3(1867)年、15代将軍徳川慶喜は征夷大将軍の職を辞め、政権を朝廷に返上しました(大政奉還)。その年に王政復古の号令が発せられ、新政府の樹立が宣言されました。しかし旧幕府側と新政府側との争いは続き、野木地域を含む古河藩領内も影響を受けました。

明治2(1869)年に古河藩は古河県となり、野木地域は明治5(1872)年に古河県から栃木県へと移りました。様々な制度が新しくなる中、明治6(1873)年に政府が行った全国の土地を再点検した上で土地の価格を決め、その価格から毎年納める税金を決めた改革(地租改正)は、野木地域にも大きな影響を与えました。

その後、町村制という法律が明治21(1888)年に公布され、野木地域の10の村が合併し、現在の野木町のもととなる「下都賀郡野木村」が誕生し、最初の役場は法音寺境内に置かれました。それまでの村々の名前は、現在でも大字名として残されています。

## ◆ 渡良瀬遊水地と谷中村

野木町の西にある渡良瀬遊水地は、栃木・群馬・埼玉・茨城の4県にまたがる日本最大の遊水地です。遊水地ができるきっかけとなったのは、渡良瀬川の大洪水と上流の足尾銅山から流れ出た鉱毒による被害でした。そのため栃木県は、渡良瀬川の改修と谷中村を含む下流部の遊水地化計画を立て、県議会で認められます。この決定に政治家の田中正造や谷中村住民らは反対・抵抗しますが、明治39(1906)年に谷中村は藤岡町と合併、廃村となりました。その前年、谷中村住民の一部の方(主に恵下野地区)は野木村に移住しました。

渡良瀬遊水地

法音寺





明治時代

## 交通の整備 ~道路・河川・鉄道~

明治時代に入り、日光道中は陸羽街道として全国の主要な道路に位置付けられました。陸羽街道の本格的な改修は明治17(1884)年には始まり、わずか5カ月で栃木県内を南北に貫く国道が整備されました。

河川の交通は、明治に入っても友沼河岸は物資の輸送に利用されていましたが、明治10(1877)年に思川の生井河岸(小山市)と東京間を結ぶ蒸気船「通運丸」が就航します。徒歩よりも早く、また馬車よりも安い運賃ということで利用客が多かったそうです。しかし、明治18(1885)年の東北本線開通(大宮—宇都宮間)のため、蒸気船よりも速い鉄道へ利用客が奪われ、江戸時代からの河岸による水運も急速に衰えていきました。

その鉄道ですが、開業当時、野木地域には駅がなく、最寄り駅は古河駅でした。昭和38(1963)年に野木駅が設置されました。



蒸気船「通運丸」

(「野木町史」より転載)

明治時代

## 下野煉化製造会社の創業

野木町は渡良瀬川と思川が合流する地域にあり、隣の旧谷中村(現在は渡良瀬遊水地)は良質な粘土や川砂が採れ、つくった赤煉瓦は河川を利用して船で運ぶことができました。このような

赤煉瓦づくりに恵まれた環境に着目し、明治21(1888)年1月、下宮村(後に合併し谷中村となる)に東輝煉化石製造所が設立されました。そして、同年10月には、下野煉化製造会社が現在の野木町煉瓦窯の場所に設立されました。

赤煉瓦の製造は、明治22(1889)年からはじまりました。当時赤煉瓦は、ドイツ人技師のフリードリッヒ・ホフマンが改良し特許を得た煉瓦専用連続焼成窯「ホフマン式輪窯」2基と登り窯1基でつくられていました。現在残っているのは明治23(1890)年に完成した東窯だけで、西窯と登り窯は大正12(1923)年の関東大震災で倒壊してしまいました。

昭和8年頃の煉瓦工場外観



(野木小学校蔵)



## 明治時代

- 明治32年(1899) 野渡地区の新井製糸所で機械導入を図り、本格的な製糸工場となる
- 明治33年(1900) 野木村野木に川田製糸所が設立される
- 明治43年(1910) 国による渡良瀬川の改修がはじまる

## 大正時代

- 大正12年(1923) 関東大震災により煉瓦建造物の多くが倒壊。以後需要が激減する

## 昭和時代

- 昭和46年(1971) (株)シモレン(旧下野煉化製造会社)での赤煉瓦製造が終わる
- 昭和54年(1979) 旧下野煉化製造会社煉瓦窯(東窯)が国の重要文化財に指定される



野木町でつくられた赤煉瓦は、1番多い時で年間に約600万個もつくられたんだって。すごいね!

## 明治時代

# しもつけれんがせいぞうがいしゃのぎ 下野煉化製造会社と野木

明治22(1889)年から製造された<sup>しもつけれんが</sup>下野煉化製造会社の赤煉瓦。この地で赤煉瓦がつけられた背景には、建築用赤煉瓦の需要増加がありました。煉瓦は欧米を見本とした近代建築や、関東各地の鉄道や水道施設にも多く利用されました。また、赤煉瓦の<sup>しゅつか</sup>出荷には、はじめ舟運が利用されていましたが、古河駅まで馬車で運び、鉄道に積みかえることで、より早く東京方面に出荷できるようになったため、鉄道輸送に切り替わっていきます。その後もこの地では赤煉瓦をつくり続けましたが、関東大震災以後、建材に赤煉瓦が使われなくなってきたため、昭和46(1971)年に製造を中止しました。ここでつけられた赤煉瓦は、古河第一小学校旧正門(茨城県古河市)や野渡地区の新井家ふるさと記念館(旧新井製糸所)などで見ることができます。

## 殖産興業と野木



新井製糸所 (新井家ふるさと記念館提供)

明治以降、政府は産業や経済での欧米諸国との差を少しでも縮めようと国家の近代化を押し進めました。これを「殖産興業」といい、官営(政府経営)の模範工場や鉄道、鉱山などの事業を政府が中心となって進めました。当然ながら、野木地域にも殖産興業の波が押し寄せてきました。そのひとつが製糸業です。当時の日本の重要な輸出品のひとつだった生糸は、蚕の繭が原料です。野木地域では蚕を育てる農家が多く、また蚕の繭から生糸をとるための製糸所が2つあり(新井製糸所と川田製糸所)、殖産興業を支えていました。



所野第一水力発電所

(日光市)

(佐野市)

## 江州屋煉瓦煙突



古河第一小学校旧正門

(古河市)

## きらり館の煉瓦倉

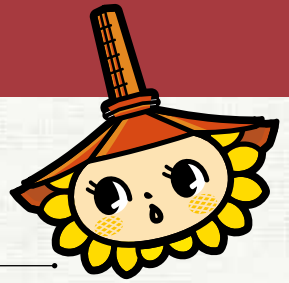


(野木町)



# れんがが 煉瓦ができるまで

煉瓦はこうやって  
つくられていたんだね



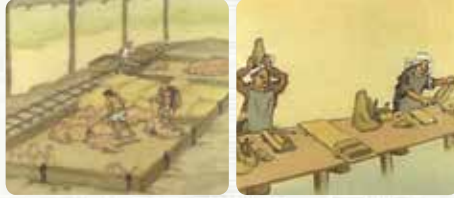
原料採取 → 素地製造 → 乾燥 → 焼成(下図) → 出荷

粘土は旧谷中村、川砂は  
主に思川から船で運びました



煉瓦製造画譜：土取場  
(北海道立博物館提供)

ホフマン窯ができてからは、機械による  
素地製造が行われるようになりました



同画譜：源土船場  
(混合土練)



同画譜：型抜場  
(手抜き素地製造)

屋内で20~25日、屋外の場合  
約1週間乾燥させました



同画譜：干場  
(素地天日乾燥)

輸送法は、船→鉄道→  
トラックと変化しました



出荷を待つ煉瓦  
(新井家ふるさと記念館提供)

## れんがしょうせい ホフマン窯での煉瓦焼成

焼成室は全16室。全室で約22万個焼成。  
焼成温度約1,000度。23日間で一周した。



窯内部の様子

新聞紙間仕切  
空気の流れを仕切る  
ため、新聞紙を  
貼り合わせた大き  
な紙を窯と窯の  
間に張ります

2

4  
焼成中の窯の3窯先の煙道より煙突  
へ排気されるようにダンパーを開け、  
空気を流します

※ダンパー：煙道から煙突へ排気を行う装置



ダンパー開閉器



5  
熱風で次に焼成をする窯の  
煉瓦を乾燥させ、予熱します

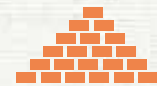
窯上部(2階)と投炭孔(とうたんこう)の様子

1 窯詰め(搬入)

これから焼こうとする素地煉  
瓦を5窯以上積み込み、窯出  
入り口は泥と煉瓦を積み上げ  
て密閉しておきます



煉瓦素地詰め込みの様子  
(深谷市教育委員会提供)



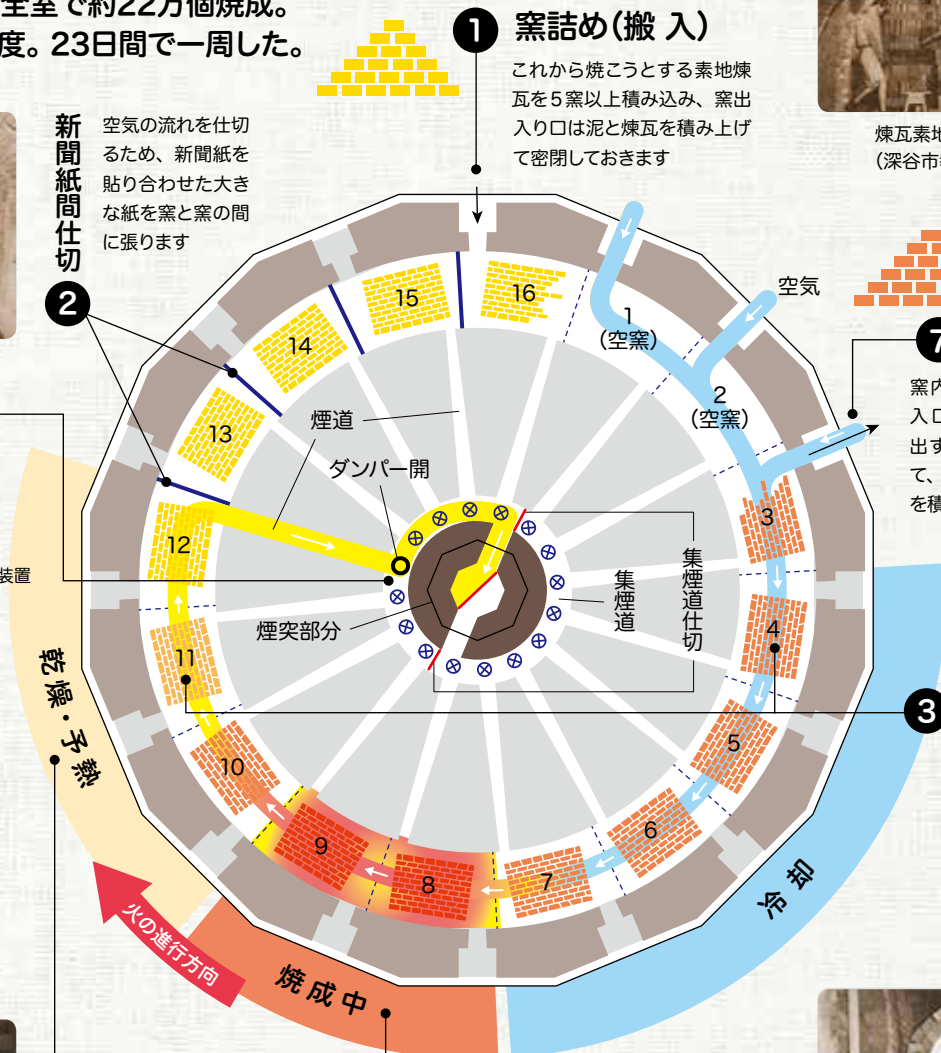
7 搬出

窯内に空気を送り込む  
入口と煉瓦を搬入・搬  
出する入口のみを開け  
て、他の入口は煉瓦と泥  
を積み上げてふさぎます

4号窯、11号窯のいずれかに焚き口を設  
け、薪を使用して点火を行います。焚き  
口は点火が終わると取り壊され、火が1  
周すると、この窯でも煉瓦を焼きます



焚き口(ロストル) 仮組の様子





# 野木町の現代

## 昭和時代

- 昭和5年(1930) 渡良瀬遊水地が完成する
- 昭和38年(1963) 町制施行により、下都賀郡野木町となる
- 昭和48年(1973) 町章を制定
- 昭和51年(1976) 町水道給水がはじまる

## 平成

- 平成4年(1992) 第1回ひまわりフェスティバル開催
- 平成10年(1998) 公共下水道の供用はじまる
- 平成24年(2012) 野木町煉瓦窯の保存修理工事に着手。渡良瀬遊水地がラムサール条約湿地に登録される
- 平成28年(2016) 交流センター「野木ホフマン館」が開館
- 平成29年(2017) 野木町煉瓦窯&ハート池が「恋人の聖地」に認定される



野木町は水と緑と  
歴史に彩られた魅力  
あふれる町なんだね

## やすらぎに満ちた 明るい町を目指して

栃木県の南の玄関口に位置する野木町は、JR野木駅を中心とした住宅街と周辺の田園地帯が調和した自然豊かで住みやすい町です。そうした環境にある野木町では、「みんなでつくる野木町の明日」を合言葉に、子どもから高齢者までが安全・安心に暮らせて、活発な経済活動と町を育ててきた歴史や自然に囲まれながら、男性・女性問わず健康で楽しく暮らしていけるまちづくりに取り組んでいます。

そして、今ある暮らしをただ守るだけではありません。思川や渡良瀬遊水地に代表される「水」、豊かな自然の風景が残る思川周辺や町東部の平地林や田園風景などの「緑」、そして神社やお寺、文化財など町の「歴史」。町の宝でもあるこの3つを活かしながら、次の世代へも残し伝えていけるよう取り組んでいます。

今後も、町に住む人たちには「いつまでも住み続けたい」、訪れる人たちには「何度も訪れたい」と思ってもらえるまちづくりを進めていきます。



のぎ水辺の楽校

赤塚自然の森



赤塚ふれあい公園





ワタラセツリフネソウ



チョウトンボ

## 渡良瀬遊水地の 自然と役割

渡良瀬遊水地は利根川の中流部に位置しており、渡良瀬川、思川、巴波川が流入しています。元々沼地や湿地が広がり、洪水被害の多い地域であったため、周辺の治水（洪水などの災害から守るための事業）と東京などの首都圏の利水（遊水地や湖沼から水をひき利用すること）のために整備されました。外周が約30kmあり、南にはハート型をした渡良瀬貯水池（谷中湖）があります。

国内で最大の遊水地であり、約15km<sup>2</sup>の面積を誇る広大なヨシ原と、そこを中心とした湿地、樹木、池沼などの多様な環境にはたくさんの動

植物が生息しています。植物で約1,000種、鳥類約260種、昆虫類約1,700種、魚類約50種が確認されており、中には絶滅危惧種も多数含まれています。環境の変化により他の地域では珍しくなってしまった動植物も、遊水地ではごく普通に見られるものが多くあります。

遊水地として整備されてからも、昔から続くヨシ焼きや土壌の撈はんなど、人の手を加えることで豊かで多様な自然をそのまま保ち続けています。渡良瀬遊水地が「生きている自然の博物館」と言われているのはこのためです。

## ラムサール条約湿地として

平成24（2012）年7月、国際的に重要な湿地として、渡良瀬遊水地がラムサール条約湿地に登録されました。ラムサール条約とは、正しくは「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」という名称で、湿地に生息・生育する動植物を守り、生態系を維持することを促す

野木神社のふくろう



コウノトリ

ための国際条約のことです。

ラムサール条約湿地では、「保全」「賢明な利用」（湿地の生態系を維持しながら、そこから得られる恵みを続けて活用すること）「CEPA」（対話、教育、参加、啓発活動）という理念が掲げられています。渡良瀬遊水地の場合、「賢明な利用」として、ここで採取されるヨシを利用したヨシズ作りや、多様な湿地環境を維持するために行う年に1度の「ヨシ焼き」、近隣市町や様々な団体による自然観察会・学習会など、多くの人たちにこの貴重な自然環境に触れてもらう機会をつくり出しています。

ヨシ焼き





国指定重要文化財

1 野木町煉瓦窯  
旧下野煉化製造会社煉瓦窯

明治23(1890)年から昭和46(1971)年まで動いていたホフマン式の煉瓦窯。1周で約22万本の赤煉瓦をつくることができた。建造物として価値が高く、昭和54(1979)年には国の重要文化財に指定された。



県指定有形文化財

2 野木神社の黒馬繫馬図絵馬

古くから神社に馬が奉納されてきたのが、後に板に馬を描いたものを奉納したのがはじまりとされる「絵馬」。野木神社に奉納されている黒い馬が描かれた絵馬は、江戸時代後期に活躍した画家・谷文晁(たにぶんちょう)が描いている。



町指定文化財

3 木造阿弥陀如来立像

鎌倉時代に活躍した快慶の作で、法得寺本堂の本尊である。頭部の両頬から額にかけて肉好きが良く張りのある明快な造りとなっている。製作年代は鎌倉中期から後期の作である。



町指定文化財

7 満福寺の板碑

満福寺の境内にある供養塔。鎌倉時代の正元(1259)年に立てられた県内最古の板碑とみられている。高さは129cmで野木町周辺では最大級。板碑には、「種子」と呼ばれる梵字と蓮の形をした蓮座が彫られている。



県指定文化財

15 野木神社本殿・拝殿2棟(附、棟札3点)

野木神社は延暦年間坂上田村麻呂が現在の地に移したとされる。近世は代々古河藩主の厚い崇拝をうけた。文化8(1811)年火災により焼失したが土井利厚の寄進により文政4(1821)年に再建された。



町指定文化財

17 工事落成の図絵馬

拝殿上部に奉納された絵馬で友沼河岸の改修工事の完成を記念して、明治17(1884)年に奉納されたものである。当時の河岸や船着き場の様子、船の種類などが描かれている。



# 野木町 歴史散策MAP



県指定史跡

19 大塚古墳

今から約1500年前の古墳時代の方墳（四角状のお墓）といわれ、この地では珍しい古墳の形をしている。一边が約23m、高さ3.5m、周辺は竹林に囲まれていて、古墳の上には稲荷神社が祀られている。



町指定文化財

20 古河公方足利成氏の墓

関東における戦国時代の幕を開ける役割を担った足利成氏は、宝徳元（1449）年に第5代鎌倉公方となるが、その後戦いに敗れて古河に逃れ、初代古河公方となった。死後、成氏が建立したとされる満福寺に葬られた。



町指定天然記念物

22 野木神社の公孫樹（いちよう）

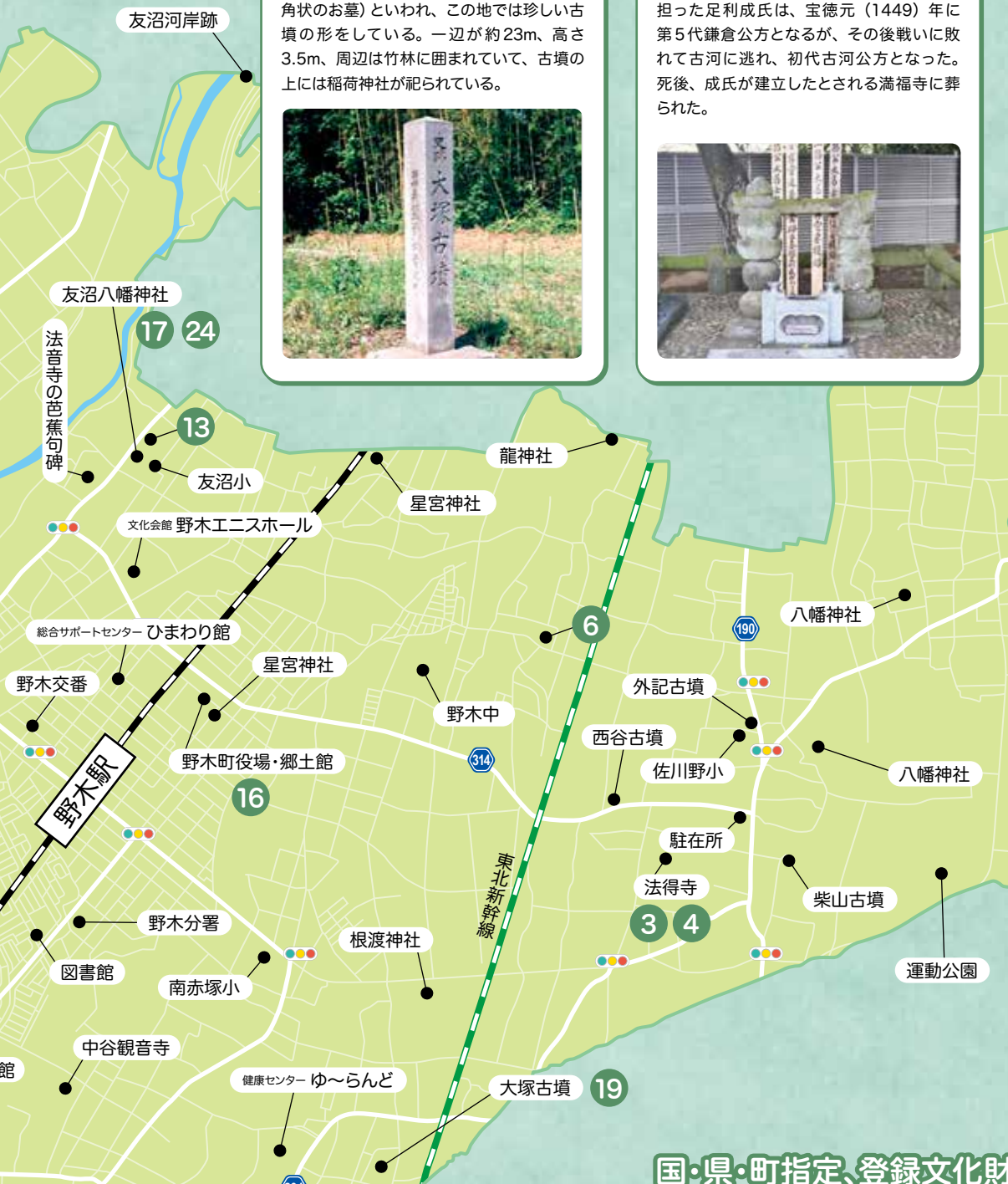
野木神社の境内にある大イチョウは樹齢が約1200年、高さ約17m、太さ約9mで「とちぎの名木百選」に選ばれている。また、出産した女性の母乳がよく出て乳児が健康に育つよう祈り願う民間信仰がある。



町指定無形文化財

25 太々神楽（五行の舞）

野木神社に江戸時代中期から伝わる12座の太々神楽の一つ。一時期消滅していたが、平成11（1999）年、小山市の太々神楽を参考に復活した。舞うのは地元の小学生の女の子たちで、毎年4月と12月に奉納される。

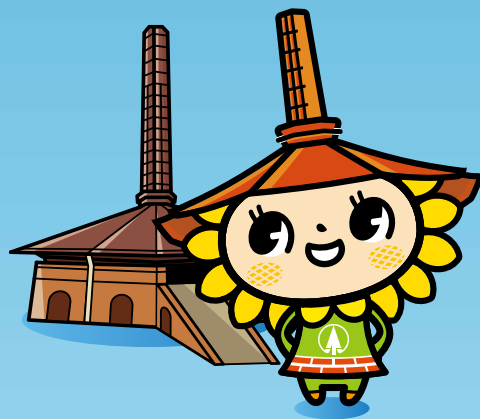


国・県・町指定、登録文化財

No.	名称	No.	名称
1	国 旧下野煉化製造会社煉瓦窯	15	県 野木神社本殿・拝殿2棟（附、棟札3点）
2	県 黒馬繫馬図絵馬（野木神社）	16	町 渡辺家のカラクリバシゴ
3	町 木造阿弥陀如来立像（法得寺）	17	町 工事落成の図絵馬（友沼八幡神社）
4	町 銅造薬師如来立像（法得寺）	18	町 棒火矢絵馬（野木神社）
5	町 銅造観音菩薩立像（満願寺）	19	県 大塚古墳
6	町 館野馨一家文書	20	町 古河公方足利成氏の墓（満福寺）
7	町 板碑（満福寺）	21	町 猪苗代兼載の墓（満福寺）
8	町 種子十三仏板碑（岩崎家）	22	町 公孫樹（野木神社）
9	町 庚申供養板碑（岩崎家）	23	町 野木神社ケヤキ
10	町 算額（野木神社）	24	町 友沼八幡神社ケヤキ
11	町 旧野木宿道標	25	町 野木神社太々神楽
12	町 野木神社俳句奉納額	26	国 旧新井製糸所事務室
13	町 友沼村地引帳・地引絵図	27	国 旧新井製糸所漆喰蔵
14	町 加藤伊一家文書	28	国 旧新井製糸所煉瓦蔵

国…国指定 県…県指定 町…町指定 国登録





のぎのんと学ぶ野木町 野木町のあゆみ 令和5年11月

発行 「野木町煉瓦窯」を活かした地域活性化プロジェクト実行委員会  
野木町教育委員会生涯学習課 TEL.0280-33-6667

※この冊子は、「平成28年度文化庁文化芸術振興費補助金（文化遺産を活かした地域活性化事業）」を活用して作成したものを改訂したものです。

